

靖 上 井

井 上 靖

新潮社版



日本文学全集 47

井 上 靖

発行/1967年9月15日 十一刷/1969年9月25日

発行者/佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所/株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所/大日本印刷株式会社 製本所/大口製本所

本文用紙/本州製紙株式会社

函貼/三菱製紙株式会社 製函/文京紙器株式会社

カバー・扉・見返/特種製紙株式会社

表紙クロス/日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1967

目次

鬪牛 五

漆胡樽 六

ある偽作家の生涯 八

異域の人 一二

姨捨 一七

氷壁 一五

注解 一七

年譜 一七

解説 一七

山本健吉

三二

三三

三七

一五

一七

一二

八

六

五



井  
上  
靖



## 闘牛

来春一月二十日から三日間阪神球場で闘牛大会を開催するという社告が、大阪新夕刊紙上にでかかど発表されたのは二十一年十二月中旬だった。その日編輯局長の津上は社告の載った仮刷りが刷上ると、それを一枚ポケットに入れて、長いこと寒い応接間に独り待たせておいた田代と連立って、二三日来すつかり本調子の寒さになって、いかにも師走の街といった感じの、冷たい風が落着かなく地面から吹上げて来る午後  
の街路に出た。

ほり、出ましたな、と田代は津上から受取った新聞に強い視線をあてると、さすがに一瞬間を縦ばせた  
が、直ぐ真顔にかえって、

闘牛 「ここからはもう宣伝ですよ、遮二無二宣伝で押し切  
らなくちゃあ——」

早足で歩きながら風にあおられる新聞を四つに畳んで無造作にポケットに突込むと、

「時にひとつ新しい御相談があるんですが」

と言った。疲れというものが田代にはないらしい。

仕事の一段落がついた時には、その先の別の新しい目標に向ってもう歩き出しているのである。闘牛大会開催の社告を発表するこの段取りにまで漕ぎつける過程は相当しんの疲れるものであったが、田代はその苦勞の跡を身につけていないのである。

「どうです、いっそ、闘牛の牛全部を買っちゃまうわけにはゆきませんかね。一頭五万円として、貴方、二十頭で百十万円という勘定です。なにしろ安い！ 貴方の社で買っちゃまって戴けりゃあ世話はないんです  
が、W市の協会の方はこっちがその気なら話はつくと思わんです」

田代は、これが言いたくて四国からはるばる出向いて来たかのように、自分一人でまくし立てた。大会が終つたら二十二頭の牛を直ぐ右から左に手離してもいい。暫く金をねかせておいてもいいのなら、勿論当分握っていて形勢を見ること。ともかくやっとならぬ四国



くんだりから二十二頭の牛を引張り出して来ておいて、大会が終わったからといってそいつをおめおめ返してしまふ手はどうしてもない。百十万で買入れた牛が、ただ阪神へ持ってくるだけで、忽ち百五十万円にはなる。少しうるさいが、もし眠らせて肉にすれば、ざっと二百万円がそこは確実踏める。こういうのが田代の計算だった。

肩幅の広いがっちりした中背の体軀を、上から下まで総革の重そうな外套で包んで、これも近頃では貴重品に属する少々古いがごつい鱈革のボストンバッグを手にした田代は、御堂筋へと出る人通りの少い焼跡の一本道を歩きながら、向かい風に声を浚われるのを感じて、立止っては長身の津上を見上げるようにしては喋った。

うんうんと津上は背いて聞いていたが、勿論、この話にのって行く気持はてんから持合わせていなかった。創立資金十九万五千円という社の世帯では、今度の闘牛大会を主催するというただそれだけの事が、誇張でなしに社運を賭した身にあまる大事業であった。当のその闘牛大会の費用の捻出にさえ四苦八苦の現在

の社の財政状態であつてみれば、出場牛の全部を買いてとつてしまふなどという事は所詮適わぬ大それた望みなのだ。この国での二大新聞の一つといわれるB新聞の社員だった者が主要な構成メンバーとなつて、去年の十二月創立してから一年になるが、今もって植字から印刷、写真、連絡、何から何までB新聞の機能に依存しているところから、世間からはとかくB新聞と同一資本の、いわばB新聞の子会社と見られがちだったが、外見はともかくとして実際的な経営面ははつきり分離していた。海千山千の興行師田代がこんどの闘牛大会の契約に当つて、大阪新夕刊の経済状態を一応も二応も調査していない筈はなかった。それにも拘らず多額の金をつぎ込もうというのは、B新聞の背景を過大に評価して、罷り違つても損はないと睨んでいるからで、創立一年そこそこの小新聞を買いかぶつて、当の闘牛大会の事業のほかに、又しても百万円余の大仕事を大真面目に持ち込んでくるところに、いかにも田舎の興行師らしい田代の甘さもあれば、又いっしょに仕事をするとなるといきなり本性を現わして、仕事師の面貌をまる出しにしてくる、ちよつと顔をそむけた

くなるようないけ図々しさもあった。

しかし津上は田代と組んでこんどの仕事をすることに大して不安も危惧も感じてはいない。田代の持つ興行師としての属性は大體誤りなく初対面の日より見抜いているつもりだった。そのずるさも、図々しさも、金のためには時には道をも選ばぬであろう性格も。だが、この男といっしょに仕事してめったに喰われようとは思っていなかった。そうした相手の持つ警戒すべき性格のすべてに、さぐりを入れれば直きに底にとどきそうな見くびりもあることはあったが、それよりも時折はつと津上自身をむしろ一枚も二枚も人の悪い人間に思わせる、仕事への妙に純一な熱情を田代は示すことがあった。当りますよ、こりゃあ——こんな言葉を吐きながら、そんな時、田代は咬みつくような一語一語の語調の強さに似ず、その表情は全く放心しているものであった。そして遠いところでも見るように視線を空間の一点において、やがてそれをゆるく次第に上の方に動かして行った。それは恰も彼だけに見える何か神秘的な花が、遠くから彼の心を呼んでいるかのようであった。こんな時田代の頭からは決まって計算が抜

け出していた。損得を忘れた興行師の痴呆のような表情を、津上は一個の置物でも見るように意地悪く観察しながら、ふともう酔うことを忘れた自分の心に冷たくつき当るのである。

「もし、うちの社で買わなかったら——」

と津上は言った。

「それが、買おうという人物が一人あるんですよ」  
待っていましたと言わんばかりの田代の口調だった。

「実はいま御足勞願ったのもその為で、その人物にこれから会って戴きたいと思うんです。おうちの社で買って戴かない時の要心に一人探しておいたんです。共同で出資して戴いてもいいし、またこの仕事と全然切り離しても力になって貰えると思うんです。名は岡部弥太、知っていませんか。これは相当な人物ですがね」

その相当というのが田代の口から出ると津上には問題なのである。しかし津上は田代の顔を立てて、今日はどこへでも行ってやろうと思う。とにかくどうにか社告発表までに漕ぎつけたほっとした気持が、今日の

津上を気軽くしているのであった。

「郷土出身の先輩で、先輩といっても年齢は私より少し若いんですが、とにかく大した男です。阪神工業の社長で他に会社を三つ四つ持っています。伊予出身では現在なんといつても岡部さんが一番でしょう」

言うだけ言うと、田代は衝立のような身体を前かがみにして、ぐんぐんと大股に歩き出した。

田代捨松が「梅若興行部社長」という得体の知れない肩書のついた大型の名刺をもって、西宮の津上の住居にはじめて姿を現わしたのは二カ月程前のことである。社関係の訪問者はいっさい自宅では応接しないことにしている津上だったが、その日は前夜からさき子が来ていて、例によって別れるの別れないのと一悶着あった翌くる朝で、愛情とも憎悪とも受取れる押し黙ったさき子の冷たく光る瞳から逃れるためには、訪問者はむしろ彼の歓迎するところであった。

初対面の田代は、その名刺通り田舎の興行師以外の何物でもなかった。精力的な赭ら顔も、太い地声も、確かに年齢より彼を若く見せてはいたが、それでも五

十はとうに過ぎてゐる。茶色のホームスパンのダブルの上着も、大柄の縞のワイシャツも、二十代の青年が着そうな派手なもので、武骨な大きな指に二個の銀指輪をのぞかせ、部屋に入ってもこれだけは貧相な黒いべらべらなマフアラをなぜか首にまきつけていた。

用件は闘牛大会という事業の売込みだった。日本中で伊予のW市一カ処だけに行われているという牛相撲の由来と沿革を一通り説明し、それからどうにかしてこの伝統的な郷土の競技を全国に紹介したいのが、自分の生涯の念願であるというようなことを、ところどころ口上口調で弁じ立てた。

「私は一介の無名の興行師ではありますが、この闘牛を手がけることだけは興行とは思っていません。金はたんまり他で儲けさせて貰います。これまで三十年大して面白くもない田舎芝居や浪花節を一手に引き受けて、四国中を廻してきたのも、いつてみればいつか一度は伊予の牛相撲を東京か大阪の松舞台へ持って行くという夢があったればこそです」

興行とは思っていないという尻から、田代は又これほど儲けの確実な事業はないということを、繰返して

強調していた。

まるで無抵抗に田代の芝居がかった饒舌を真向うから浴びて、パイプを銜えたまま狭い庭の隅の山茶花の株に視線を投じている津上の眼は、冷たく無感動だった。こんな手合と応接するのは、津上の毎日の日課の一つであった。こんな場合いつも津上は、半分は相手の話に無感動に耳を傾け、半分はまるでそれと無関係なことを、それも多くの場合はひどく孤独な思念ではあったが、ひたすらそれに思い浸っているのが常であった。喋っている相手にしたら一向に手応えのない銚子を何本も無駄に打込んでいるようなものであったが、しかし、時折単に調子を合わせるだけの、そのくせいやに壺にはまったところのある津上の短い受け答えに接すると、話手は自分の話が相手を傾聴せしめているかのような妙な錯覚におちいつてくるのであった。

津上はますます無感動に、田代はますます雄弁になつて行った。

「闘牛というのと、これを知らない人は何かひどく柄の悪い事のように思いますが、決してそんなものではないありませんよ。それというのも土地の人が、むかし

から牛の勝負に賭けるためだ——」

田代がこう言った時だった。

「賭けるの！」

と津上は反射的に訊いた。

W市で年三回開かれる大会では、いまでも観衆の殆ど全部が牛の競技に賭けると言う。その田代の説明は、それまで田代の話を素通りさせていた津上の心に、突然奇妙な屈折の仕方とびこんできた。阪神球場か香櫨園球場のような近代的大スタンド、そのまんなかの竹矢来の中に行われている生きものの競技、それに見入っている観衆、ラウドスピーカー、紙幣束、ゆれどよめく人の波、極めて自然に、田代の言葉は、一瞬津上の頭の中にこれだけの情景を映画のひとコマのように思い浮かべたのであった。それは、よんだ、冷たい、しかし重量感のある一枚の鉛の絵であった。それから田代が何を言ったか、津上はろくに聞いていなかった。賭ける、こいつはいけると津上は思う。阪神の都会地で行っても、W市と同じようにそこに集る観衆のすべては賭けるだろう。終戦後の日本人にとつて生きる手懸りといえば、まあこんなところか

も知れない。何か適当な賭けるものを与えれば、黙っていても人はそこに集って賭けるだろう。焼跡にぐるりと囲繞された球場で、闘牛の競技に幾万の観衆が賭けている、当るかも知れない。野球もラグビーもそろそろ復活し始めたが、それが往年のように人気をかつたうにはまだ二三年かかるだろう。せいぜい牛相撲ぐらいの時代なのだ、いまは。阪神最初の闘牛大会、これは新聞社の事業としても決して悪くない。恐らく大阪新夕刊の事業としては、さしあたってここらが打ってつけなのだ。

この時の津上の眼は、そのためにどうしてもさき子が彼から別れて行けない、あの冷たいそのくせ冷たいままでねっとり燃えているような、放恣な、濡れた眼をしていた。津上は身を起すと今までとはまるで違った口調できっぱりと言った。

「考えてみましよう。そいつあ、いけるかも知れない」

それから三十分ほどして田代が帰って行くと、急に静かになった部屋の中に、津上は少し興奮している自分を発見した。何か新しい企劃と取り組んでいる時の

癖で、いつまでも縁側の椅子に腰かけたまま、口数少く身動きしなかった。こんな時津上は無性に独りになりたいのだ。

と、突然その場の沈黙を引き破るようにさき子が口を開いた。

「あなたの夢中になりそうなお仕事だわ」

彼女は部屋の隅で、田代が居た時と同じ姿勢で俯向いてあみ棒を冷たく白く光らせていた。

「なぜ？」

「なぜって、そんな気がするの。あなたきつと夢中になんなすってよ。あなたにはそんな処があるの」

それから顔を上げて、ちらりと冷たい視線を津上に投げると、さき子は非難とも歎息ともつかぬ口調で言った。

「そんなやくざな面が」

実際、津上の性格のどこかには、やくざと呼べるような面があった。

B新聞社の最も腕の立つ社会部記者の一人として、津上は誰がやっても、失敗する煩わしい社会部の副部長を三年大過なく勤め上げていた。いつも筋のびんと

入ったズボンをはいて、人との応接も仕事の捌きぶりも敏捷びんせうで時には冷たく思われるほど切れていた。どんな泥臭い事件でも、彼は紙面の上で器用にやわらかくこなした。勿論もちろんうるさいジャアナリストの世界であつてみれば、津上とて敵はあつた。金使いが悪いとか、気障きざうだとか、エゴイストだとか、スタイリストだとか、文学青年だとか、確かに一面そうした連中の非難も当つてはいたが、そうした彼の欠点が、またそのまゝ、従来の社会部記者とはどこか違つたある知的な雰囲気けいきを彼の周囲に形造つていたのであつた。

終戦後B新聞は包容する龐大ぼうだいな過剰人員を整理する合理的な方策として、印刷会社と夕刊新聞社を創設し、これら傍系会社の方に相当数の社員を転出させることになつたが、その時、夕刊新聞の編輯局長として真先に推されたのは津上だつた。三十七という年齢が、編輯局長という名にちよつとそぐわない感じだつたが、当時続々発刊されつあつた夥おほいしい夕刊紙群の中にあつて、それと競争して打勝つ全く新しい型の紙面を造り出す才能は、津上においては一寸見当らなかつたし、また社長におさまる尾本が、映画界上りで、

人間の豪胆ごうたんだけが売物の、新聞製作にはずぶの素人しやうとであつてみれば、その下で編輯の采配さいはいを揮ふるうばかりでなく、経営面においても同時に社の心棒こんぼうになり得る何よりも間違いない手堅い人物が必要であつた。そんな点でも、津上が従来B新聞社内社内に植うえてきた何事にもそつのない、行き届いた性格の印象は強くものを言つた。

大阪新夕刊の編輯局長に就任すると、津上はまず大胆に横型新聞の新しい型を採用し、読者の対象ははつきりと都会のインテリ・サラリーマンにおき、文化性と娯楽性を看板にして、記事の書き方にも、取材にも、整理にも、諷刺ふうしと諧謔かいぎやくと機智を前面に押し立てた。津上の目指したこうした新夕刊紙の行き方は一応當つたと言える。新夕刊は毛色の変つた夕刊紙として、京阪神のサラリーマンや学生たちに迎えられ、街の立売でも真先に姿を消した。戦時中の野暮よぼつたい新聞を読みなれた人々の眼には、確かに新鮮な魅力であつた。終戦後復帰した京都の大学の若い法学部の教授が、これはインテリやくざの新聞だと、大学新聞の寸評欄で評したことがあつたが、その評言もまたある程

度当っているかも知れなかった。確かに、感受性の強い詩人なら、都会の若い知識人に迎えられるこの夕刊紙にどことなく投げやりな、虚ろな、孤独の影を指摘できた筈である、それはまたそのままその新聞の編輯責任者津上のひそかに匿し持っている性格でもあった。その津上の性格を一番よく見抜いているのは、戦時中から三年越しに同棲したり別れたりして、今日まで別れる別れると言いながら、結局はどうにもならぬ関係を続けているさき子だった。

「だれもあなたの、こんなずるい、白墮落な、やくざの面を知らないのね。わたしだけ、わたしひとり」

機嫌のいい時、さき子はよくこんな事を言った。そんな時、さき子は、それが自分が津上に与えた愛情の痕跡でもあるかのように、両の眼をきらきらと輝かせた。しかし、また時によっては全く同じ言葉が、愛人への冷たい非難として発せられることもあった。

津上には郷里の鳥取に疎開させたままにしてある妻と二人の子供があり、さき子には津上の大学時代の友で、戦死してまだ遺骨の帰らない夫があった。戦時中に始まった二人の關係は、終戦後もそのままの形でず

るずると続いて、未だにこんなことには眼の早い新聞社の連中にも全然かんづかれていないのであったが、時にはそれが津上のずるさでもあるように、さき子には思われるのであった。

最初さき子が津上と交渉を持ったのは、夫の戦死の内報があつてから一年ほど経った時であつた。その頃、さき子は身の振り方について常に何かと相談相手に選んでいた津上を、その住居に訪ねたことがあつた。夏の夕方だった。ちょうど一足さきに津上も社から帰ったところで、勝手知った縁側の方に廻った彼女の瞳に映つたのは、外出から帰ったままの姿で、家中で帽子をあみだにして、ぐたりと籐椅子に身を投げかけ、ウイスキーのグラスを管めている投げやりな津上の姿だった。

さき子を見かけた瞬間、しゃんと立ち上つて洋服の上着の崩れを直した端敵な常の津上がそこにはいたが、さき子はその時長く忘れていた身内の血が熱くかき立てられてくるのを感じた。疲労をいっぱい身につけた崩れた津上の姿は孤独でもあり、妙にさき子の官能を刺戟する濡れたものがあつた。二人の交渉ができ

てからも、さき子はこの時のことを思い出す度に、やはりそうした津上を、孤独な魂のどこかが腐蝕して燐光を放っているような誰にも知られていない津上を好きだと思ふのである。

津上の愛情はかっとなえる底のものではなかった。いつもどこかに燃えきらない芯があった。赫ごとすっぽりと津上の胸の中にとびこんでも、なおそこに埋めきらぬ間隙が、さき子には感じられた。三十のさき子の心と肉体が酔わすことのできぬ眼を津上はいつも用意していた。それは愛する者の眼ではなかった。といって、ぼんとさき子を路傍に棄てる眼でもなかった。局外者のそのように、つき離して成行きを見ている、それだけに堪らない冷たい魚族の眼であった。

さき子は津上自身も持てあましているような津上の冷たい心の一端に触れると、いつも心の中に浮かび上ってくる言葉があった。悪人！ しかし時にはその悪人の非情な眼そのものが酔おうと努めることがあった。さき子はそれをよく知っていた。一種狂暴な不逞な悲しい光を帯びたその眼の故に、彼女はどんなに津上を愛したのか。しかしもうその眼を到底酔わすこ

とができないと知った時、彼女の愛は、その時々々に、悲しみに濡れ光った憎悪に変わるのであった。

興行師田代が投げた闘牛という餌に、ずるずると誘われるままに喰いついてゆこうとするのも、新聞記者のかんというより、いつてみれば、津上のそうした醉えない眼が、柄にもなく酔おうとする謀叛気の仕業のようなものであった。さき子の言葉によれば、それが津上のどこかにひそんでいる、*「やくざ」*な性格であった。

田代が津上に闘牛の話を持ちこんできたその翌日、四ツ橋の焼け残ったビルを改装した大阪新夕刊新聞社で、津上のほかに社長の尾本と整理部長のK、報道部長のS、それに田代を加えた幹部会が開かれた。闘牛大会の企劃には真先に社長の尾本が賛成した。

「そいつ面白い。あくまで本社主催、W市ならびに牛相撲協会後援という形で行くんだな。一日に五万として三日間で十五万ははいるだろう。スペインの闘牛でも持ってきたようにでかかとやるんだ」

弱い闘牛のように肥満した尾本が、機嫌のいい時の



癖で喚くような大声で言った。田舎町の映画館主を振り出しに今日の地位を腕一本で築き上げただけあって、尾本は事業となると度胸もあり、腹もあり、すべてを彼一流のかんで処理して行くといった男であった。尾本と津上が賛成する以上、この企劃に格別反対のあるう筈はなかった。話はたちどころに決まった。毎年W市のS神社で行われる一月一日場所を阪神間の近代的大スタジアムとして知られている二大球場のうちの一つに持って来ること。W市と牛相撲協会の両者を動かして、名実ともにその後援を得ること。開催期日は戸外スポーツのしゅんを外して一月下旬の三日間。これに要する全支出とこれから上る全収益の差額を新聞社と梅若興行部が折半にすること、言い換えれば儲けも損も新聞社と田代が半々に分け合うこと。但し梅若興行部の名は表面に出さず、あくまで表向きは大阪新夕刊新聞社独力の事業たる体裁をとること。そして大会終了後決算するまでに要する支出は、牛の借り賃とともに牛を球場に連れこむまでを田代が受持ち、球場に到着してから以後の費用は、会場の設定、準備、宣伝に要する費用と共に新聞社が受持って出し

ておくこと。等々が契約の主なものだった。その晩、尾本と津上とは京都の料亭に田代を招んだ。するとその翌くる晩、田代は社の幹部数名を大阪の闇市場の中のスキ焼屋に招いてじゃんじゃん酒を振舞った。「縁起をかつくわけじゃありませんが、牛を喰っちゃうという意味で、少々野暮つたいがスキ焼ということにしました」

田代は悦に入ってひどく御機嫌だった。酒が廻ると、牛を神戸に降ろしたら飛びきり派手な化粧廻しをさせて、神戸の街から西宮まで練り歩かせ、その翌日は大阪で牛行列をやってひとつ思いきり景気よく行きましよう、油の浮いた顔を平手でこすっては、田代は中腰で尾本や津上に酒を注いだ。そんな時の田代の表情は津上には子供のように見えた。

田代が便所に立った間に、それまで酔っ払って一緒に熱を上げていた尾本が、妙にしゃんとした声で言った。

「問題は入場料が上るまで寝かせねばならぬ費用だが、僕の計算では、ざっと百万円は要ると思うんだが」